語って学ぶ親も子も　金光教名古屋センター発行

e（イ）ーチカラ　No.5　最終号

家族で信心の話をしよう

あなたの家族は、話をし合うことがありますか？「今は食事の時間もばらばらで・・・」という家族が増えていることでしょう。それでも一工夫して、家族で対話をする時間を持ちましょう。そしてせっかく話をするのですから、信心のお話をしましょう。

「神様はね・・・」なんてかしこまらなくてもいいのです。「今日、こんなことがあってね」とか、「学校はどうだった？何かいいことあった？」ということからでいいのです。「別になんにもない」という返事でも、『別に』なんてことはないだろう！」などと腹を立ててはいけません。『ちょっと虫の居所が悪いな』と「そうか」と聞き流し、また次の機会に聞いてみたら話してくれるかもしれません。

何か話してくれたらもうけものです。よく聞いてあげましょう。

そこでのポイントはいくつかありますが、信心の話をしたいのですから、大切なことの一つは、その時の「心」に目を向けることではないかと思います。

その時その子（人）の心がどう動いたのか。嬉しかったのか悲しかったのか、楽しかったのか辛かったのか、喜ばしかったのか腹立たしかったのか、満足したのか不足に思ったのか、感動したのか何も感じなかったのか・・・。その時の心に寄り添ってあげましょう。そして、その心を見つめ、振り返り、見直すお手伝いができたらいいですね。

そして『その心ではダメだ』と思っても、求められないかぎり正そうとしないことです。大人はすぐに正そうとしてしまいます。するとそこで対話は終わってしまいます。大切なことは、本人が気づくことだと思います。神様に気づかせてもらうことが大切だと思うのです。そしてできれば、「ありがたいねぇ」とか「助かったねぇ」とか「和賀心になれたねぇ」と喜んであげましょう。

まずはそれぞれに一工夫。家族の対話に、信心の話に努めましょう。

親奥様がくれたもの

「ばあちゃん、ただいま。これ教会の親奥様からもらった」

教会から帰ってきた直彦くんは、小さな紙包みを、おばあちゃんに手渡した。中には金平糖が二つ。

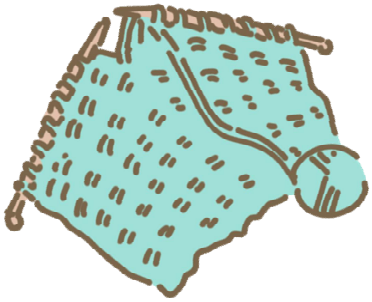
○

教会では、親奥様がいつも声をかけてくださる。

「直くん、おなかすいてへんか。これ、持って行き」

そう言っては、小さな紙包みを直彦くんにくださるのだった。

帰り道、その紙包みをあけてみると、金平糖が三つぶ入っていた。一つぶだけ口に入れてかみくだかないよう、口の中でころがしながら歩いて帰る。甘い味が口一杯に広がって幸せな気分がした。



家が見えてくる頃には、口の中の金平糖がちょうどなくなるのだった。

戦争が終って間もない頃のことで、食べる物もあまりない時代だった。

4年生になってから直彦くんは、毎朝登校する前、新聞配達をすることになった。夕方は買い物をしたり、風呂の薪を運んだり、夕ご飯の支度を手伝ったりよく働くので、おばあちゃんは大助かりだった。

○

教会から帰ってくると、いつもおばあちゃんは、

「直くん、ちゃんとお参りしたんか。やんちゃして親奥様に叱られたりせんかったか」

おばあちゃんは見抜き見通しだ。

「きょうはみんなで追いかけっこして廊下をドタバタ走ったら、親奥様が、お広前には御祈念してる人がいるし、お届けしてる人もいるから静かにせんといかんよって言われた」

「そらいかんなあ、直くん。外では走ってもいいけれども、お広前ではおりこうにして、皆さんに迷惑かけんようにしとかな」

「わかった、これからはよう気をつける。でもきょうは親奥様がいい話をしてくれた」
「そうか、どんな話をしてくれた」
おばあちゃんは編物の手を止めて、直彦くんの話をじっと聞いてくれた。

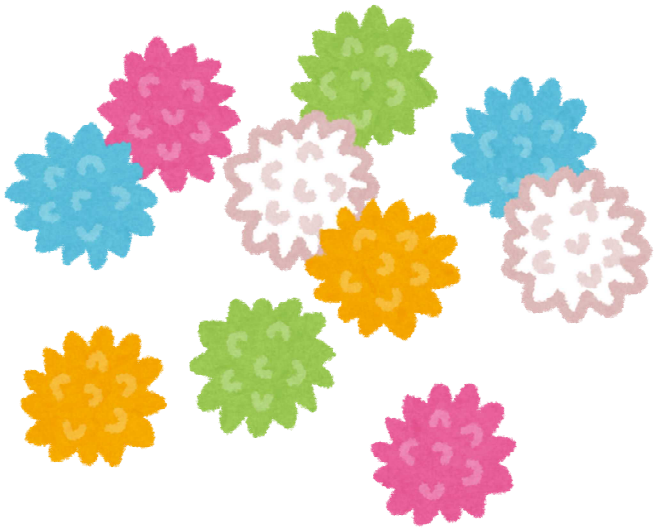
○

「みんなきょうこうやってここへお参りできる健康なからだを、あなた方はいただいているんですよ。
その喜びを神様にお礼申して、そしてまた明日もお参りできる健康なからだを作らしていただけますように、そういうお祈りをしなさいよって、そう教えてくれた」
「そうかそうか、いいこと教えてもらったなあ。ありがたいなあ」
おばあちゃんは親奥様の言葉をつぶやきながら、また編み棒を動かし始めた。

○

あれから70年近くの歳月が過ぎ、直彦くんは今ではもうすっかり年をとって、長男夫婦と5年生の孫と一緒に暮らしている。
今でも、あの頃の金平糖のことをなつかしく思い出すことがある。

おばあちゃんも、もうずいぶん前に亡くなったし、親奥様もすでにこの世においでにはならないが、直彦くんは金平糖の入った紙包みを渡していただいた時の嬉しかった気持ちと、親奥様のお心遣いを今も決して忘れることはない。
そして小学生だった自分に、どんな風に御祈念するのかをきちんと教えくださったことを、心からありがたく思っている。



感謝の気持ち

T君は、大学4年生の時、隣町の居酒屋でアルバイトしていました。勤務時間は、夕方5時～翌朝5時までです。始発に乗って帰宅するまで時間があるため、いつもアルバイト仲間と朝ごはんをファミリーレストランで食べて帰っていました。

そんなある日、いつものようにアルバイトが終わり、アルバイト仲間のY君と一緒に朝ごはんを食べていた時の話です。Y君も大学4年生で、これから就職をどうしようか二人で話していました。そこでY君は、「スポーツマッサージの仕事をしたいな。これから出てくる若いアスリート達の手助けが出来たらいいな。でも、年寄りのマッサージはやりたくないな」と言いました。それに対してT君は、「Y君は、子どもの頃おじいちゃんおばあちゃんのお世話にならなかったの？」と尋ねました。Y君は「子どもの頃、一人でいることが多かったので、いつもおばあちゃんが遊び相手をしてくれていたよ」と答えました。T君は「おばあちゃんにお世話になっていたんだね。だったらおじいちゃんやおばあちゃんにいつもありがとうという思いでマッサージをしてもいいんじゃないの？」と言いました。すると、Y君は涙を流しながら「まさかT君にそんな事言われるなんて思っていなかった」と言ったのです。

○

T君は、いつも金光教の教会でお話を聞く機会があったので、このような言葉が出たのでしょう。

教祖様のみ教えに「年寄りを大切にせよ。人間は自分の考えで先に生まれて来たのではない。みな、神のおかげで生まれて来たのである。早く生まれた者ほど世のために働きをたくさんしている道理であるから、年寄りを敬うのである。」とあります。私たちは、みんなに支えられてここまで生きてきています。しっかりと感謝の気持ちを持たないと、お世話をしてくれた方たちに申し訳ないですね。

感謝の気持ちを持つ生き方は、人や物、神様に喜ばれます。そうすると、運命が変わり、明るい将来が待っていると思います。

☆　鬼まんじゅうの作り方　☆

材料（約１０個分）

- さつまいも・・・・・　４００グラム
- 砂糖・・・・・・・・　７０グラム
- 小麦粉・・・・・・・　７０グラム
- 塩・・・・・・・・・　少々
- カップ（アルミ製）・　６号

作り方

① さつまいもの皮を剥き、約１ｃｍのサイコロ角に切り揃える。

② サイコロ状に切ったさつまいもを水にさらす。（約１０分程度）

③ 水を切ったさつまいもに砂糖をまぜ、約１５分なじませる。

④ 塩と小麦粉を加え、よく混ぜる。

⑤ カップに入れ、蒸し器で１５分蒸す。

子供に伝わる親の稽古

道子さんは中学生の息子さんがあり、家庭のこと、家族のことを毎週末に教会にお届けに来られています。今日はどうも元気のない顔をしています。

先生　どうなさったんですか。今日は元気のない顔をしていますね。

道子　先生、息子のことが心配です。成績が悪くなっているんです。いつも解けている問題でも、途中の計算を適当にやって何問も間違えてしまうんです。家でも気が利かないところがあって、よく夫に叱られています。どうかちゃんとそういうことが気をつけられるようになりますよう、お願いします。

先生　道子さん、赤ん坊の時は、何をやっても褒められますよね。ご飯を食べるのも、おトイレをするのも。それは出来ることが当たり前ではないからです。

道子　そうですね。

先生　でも、だんだんと大きくなっていくと、「出来ることが当たり前」というように変わってしまいます。テストでも、100点が基準。60点をとれても、出来なかった40点ばかりが目に入る。出来ていないことばかりが目に入るようになります。息子さんはいつもは問題が解けるということですから、まず、問題が解けるようになっていることを喜ばせてもらいましょう。これが一つです。

道子　でも、実際にテストでは間違えてしまうんです。どうしたら直りますか？

先生　ここからが二つ目の大事なことです。金光教では、実意丁寧とよく言うでしょう。実意とは、「思いが行き届くこと」、丁寧とは、「行動が行き届くこと」です。このたびのお願いは、息子さんに実意丁寧になって欲しいというお願いになると思います。ですが、お願いしただけで子供が実意丁寧になるでしょうか。

道子　わかりません。

先生　そこで、効果抜群のお願いの仕方と実践の仕方があるんですよ。それはね。お母さんが家で実意丁寧の稽古をすることです。

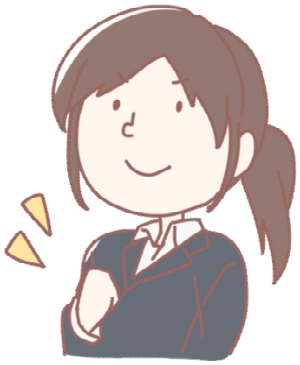
道子　息子のお願いなのに、私が稽古をするんですか？

先生　そうですよ。子供はやっぱり、親を見ています。親が大事にしていることは大事にするし、親が手を抜いていることは手を抜きます。家庭の中で、母親の道子さんが細かなところに気を配る「実意丁寧の稽古」をされてはいかがですか。その姿勢が伝われば、息子さんの生活態度も変わって、それが回り回って、テストなどでも結果に現れてくるのではないですか。

道子　そういうものですか。

先生　そういうものですよ。一つに出来たことを喜ぶこと、二つに実意丁寧の稽古。その二つに取り組んでいきましょう。きっと、息子さんに信心が伝わるきっかけにもなりますよ。

それから道子さんは、息子さんが出来たことを素直に喜びながら、毎日、実意丁寧の稽古をしています。



人が助かるお役に

この前、こんなことがありました。お年寄りの夫婦が、私の地元の駅前の通りをうろうろしているのです。あちらの食堂、こちらのレストランをのぞいています。通りがかった私は、『ああ食事がしたいのだろうなぁ』と思いました。時間はお昼の２時を過ぎていて、その辺りのお店は、もうどこも閉まっているようでした。私は少々急いでいたので、声をかけずにそこを通り過ぎました。

しかしそのあと、そのお年寄り夫婦のことが気になって仕方がありません。私の急ぎの用は、そのお店が混みあっていてとても時間がかかりそうです。そこで私はあきらめて、もう一度そのお年寄り夫婦を探しに、駅前の通りに戻りました。

幸いにお二人を見つけた私は、「食事がしたいのですね」と声をかけました。ご夫婦は喜んでくれて、私は駅の二階にある食堂街へとお連れして、めでたしめでたし。

少し回り道でしたが、人が助かるお役に立てたでしょうか。神様にもお喜びいただけましたでしょうか。まだまだ素直じゃないなぁと思っているでしょうか。

今さら聞けない金光教のギモン

「取次とは何か？」

　取次とは、参拝者の願いを神に届け、神の願いを参拝者に伝えて、神と人が共に助かる生き方を求めていく、金光教における救済と信仰の中心です。

　金光教の本部及び全国の教会の広前では、日々、この取次が行われており、いつでも、どなたでも、取次を願うことができます。

〇編集後記

　ご愛読いただきありがとうございます。今号で e-チカラは最終号を迎えます。これまで、親子の信心継承のきっかけになればと願い、普段の生活の中での神様が感じられるような内容を中心に掲載してきました。

　どうぞ、ここからは皆様のご家庭で神様が生き生きと現れますように、お祈り申し上げます。

ｅ - チカラ　第５号　平成３０年１１月２７日発行

金光教名古屋センター　発行者　石黒眞樹
〒451－0043　名古屋市西区新道１－26－13
TEL 052-433-8181　FAX 052-571-8007